

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

地球の生き物と人との共生を求めて：
民博・特別研究のシンポジウムから 特別研究：
生物・文化的多様性の歴史生態学：
希少動物・希少植物の利用と保護を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009230

特別研究 ● 生物・文化的多様性の歴史生態学——稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に

現代文明と地球環境とのかかわりを考える際に、稀少生物の保護や生物多様性の維持は、地球環境問題のなかの中心課題のひとつであるといわれる(池谷・林編 2008)。たとえば、ポスト工業化社会の現代日本では、シカ、イノシシ、サル、クマなどによる人および農作物への被害が社会問題となっている一方で、コウノトリやトキ、ジュゴンやウミガメなどの保護が叫ばれている。現代の地球では、およそ76億の人々(国連・2017年版世界人口白書)が暮らしているが、今後、地球上でどのようにして持続可能な自然資源利用を行っていくかということは、まさに現代の人類が直面する課題である。

国立民族学博物館(以下、民博)では、過去40年間にわたり海洋、高地、砂漠、森林などの自然と人類とのかかわり方を民族学的に明らかにしてきた(池谷編 2009 など)。それらの成果は、文化生態学、政治生態学、歴史生態学の3つの枠組みに分類できる。たとえば梅棹忠夫は、「文明の生態史」の視点からユーラシア大陸の東の端の日本と西のヨーロッパの近代化の過程に共通の段階が存在することを示した(梅棹1967)。佐々木高明は、「文化の生態史」の視点から西日本から中国南部の雲南省、ブータンにかけて共通に広がる照葉樹林地帯に焼畑を中心とした共通の文化複合(「照葉樹林文化」)がみられることを指摘した(佐々木1982)。しかしながら、これらの生態史(歴史生態学)の研究は現象の時間軸が不明瞭であるために考古学や歴史学の研究者から批判されることも多い。

今回の民博・特別研究のシンポジウム(2018年3月19-21日)では、民族学を中心に考古学や歴史学の視点を統合する歴史生態学の視角から、人類と生き物とのかかわりの現在および過去を把握することを目的とした。対象地域は、日本を含めたアジアの事例を中心にしながらも、寒冷地、島嶼・海洋、砂漠、森林、内水などの世界各地の多様な環境が選ばれている。これらは、動物や植物と人間社会との相互関係について地球、大陸、地域レベルから考える試みでもある。

アジアにおける生き物——人関係の多様性

世界的にみてアジアにおける動物の行動・生態はユニークで

ある。たとえば、日本は世界のサル類の分布の北限地であり、イノシシ類は本州の北に生息地を拡大している。冒頭で言及したように、両者とも獣害を起こす動物であることには間違いのないが、おのおのの動物と人とのかかわり方は異なっている。ジョン・ナイト(クイーンズ大学)は、「農作物加害動物に対する追い払い反応に関する研究」を報告した。追い払いとは、加害動物を逃走へと押しやる意味であり、狩りの場合の捕獲とは反対に、脅かすことで逃走させることが目的である。黒澤弥悦(東京農業大学)は「琉球列島にみるイノシシの狩猟活動と飼育——その家畜化について考える」のなかで、イノシシを狩猟したときに残された幼獣を飼い慣らす理由について考察した。

日本以外のアジアの事例としては、卯田宗平(民博)が「内水面漁場へのヒューマンインパクトと鵜飼漁師たちの生業戦略」という発表で、埋め立てなどに伴う漁場環境の変化のなかで家禽・カワウに依存する中国の鵜飼漁師の新たな対応に言及している。オマール・ファルーク(バングラデシュ農業大学)は、「バングラデシュの森林におけるガヤルと人間の関係」について論じた。ガヤルは、ブータンからインド、バングラデシュにかけての森の中で放し飼いにされている半野生牛である。ガヤルは人に接することはなく、塩を求めて集落にやってくる。この報告では、ガヤルと人とのかかわり方が詳細に述べられた。

一方で、アジアにおける植物の生態もまたユニークである。竹林はモンスーンアジアに共通に広がる植生で、湿潤アジアの大陸部の焼畑地では伐採後に竹林が生まれる。中井信介(佐賀大学)は、「モンスーンアジアにおける竹文化——タイ北部山地の農耕民モンの視点」のなかで、モンによる竹の種類についての認識、竹材の建物や道具への利用、筍の食用状況を示すと同時に、過去50年間における人々の移住にともなう竹利用の変化を報告した。またヤシ林は世界の熱帯に共通して見られるが、サゴヤシのデンプン利用は東南アジアの島嶼部に広がり、なかにはそれを主食にする人々が暮らす。小泉都(京都大学)は「ボルネオにおける澱粉源ヤシの利用とその歴史——狩猟採集民プナンの事例」のなかで、プナンがヤシからとれるサゴを澱粉として利用していることに言及する。



特別研究会の様子(2018年3月19日、国立民族学博物館)。



在来のマダケからなる竹林(2018年3月21日、大阪府茨木市)。

以上から、アジアでは野生動物と人、家畜と人、野生植物と人とのかかわり方がいかに多様であることが理解できる。同時にそのかかわり方は、追い払い、放し飼い、飼いならし、家畜化など、人の関与の程度によって異なっていた。

世界における生き物と人の関係史

生き物と人との関係は、長期間にわたる歴史のなかで変化してきた。大石高典(東京外国語大学)は、「コンゴ盆地の森林景観に『文化景観』は存在するか—カメルーン東部ジャー川流域における調査から」のなかで、景観全体を変える一時的な環境改変と、景観の一部を攪乱する2次的な環境改変を分けて、コンゴ盆地の環境変遷史を論じている。そこでは、森への農耕民の移住史、農耕民と狩猟採集民との共存関係の形成などが景観形成の背景になっている。エドアルド・ネベス(サンパウロ大学)は、「出現しなかった新石器時代—古代アマゾンの栽培と農業を隔てる微妙な境界線」のなかで、古代アマゾンの食糧では、栽培植物と同じくらい非栽培植物にも依存していたということから、他の地域とは異なり、食糧生産の主要な戦略として農業が進化することはなかったと推察している。その一方でピーター・マシウス(民博)は、「アジア・太平洋地域のタロイモ—食料および飼料としての栽培化モデル」のなかで、タロイモの野生個体群の最新の観察結果から、熱帯アジアで生まれたとされるタロイモの栽培化のモデルを提示する。また、大橋麻里子(一橋大学)は、「ペルーアマゾンにおける氾濫原農法と焼畑—シビボの事例」のなかで、東南アジア起源のバナナがアマゾン川流域に伝播して、氾濫原を利用するバナナ農法が地域住民によって確立されたことを示す。同時にバナナの受け入れが、川の氾濫原での人々の定住化につながった可能性を述べる。

一方で、アメリカ大陸の自然環境は緯度に応じて南北で大きく異なる。岸上伸啓(民博)は、「北アメリカ・アラスカ地域におけるホッキョククジラと人類をめぐる歴史生態学」のなかで、対象地域で捕鯨が生まれたのは10世紀ごろであり、それ以降20世紀後半まで捕鯨が継続されてきたとした。しかしながら20世紀後半のクジラの保護の時代に入り、地域住民は新たな対応をしてきたことを報告した。高木仁(民博)は、「カリブ海、ミスキート諸島近海の住人とアオウミガメの400年—その人類史的意義について」のなかで、大航海時代以降現在までのミスキート諸島のアオウミガメの資源開発の歴史を概観する。かつては、食肉用にヨーロッパへ輸出されていたものが、近年では先住民ミスキートのなかで自給的に利用されるようになったように、両者の関係には変化がみられるという。ステファン・ロステン(フランス国立科学調査センター)は、「アマゾン川流域の歴史生態学—先コロンブス期の景観に対する学際的アプローチ」という報告で、ギアナ湾岸のサバンナをとりあげて、古代人による景観の改造について論じた。とくに、川沿いに何千もの堤防が見いだされており、集約的農業の技術の名残りとして注目している。このように南北アメリカの3事例には、ヨーロッパとの経済的な関係が早くから形成されていたこと、多数の先住民と移民が存在することなどの共通点が多い。

文明からみた生き物—人関係の将来

これまで、生き物と人との関係を把握するなかで都市文明の存在が軽視されていた。しかしながら、古代文明の形成以来現在まで、村と都市との密接な結合は世界的に進行してきた



アオウミガメの販売の様子(2017年8月21日、ニカラグア)。

る。今回のシンポジウムでは、古代のシルクロード世界や中世のインド洋交流圏、17世紀の世界システムの形成などの事例をとりあげ、それらが現代社会における生き物と人とのかかわりにいかに影響を与えたのかが議論された。とりわけ寺村裕史(民博)は、「シルクロードの古代オアシス都市における環境利用—中央アジア・ウズベキスタンにおける遺跡地と周辺環境」のなかで、古代オアシス都市での家畜利用や水利用などの実際を考古学的手法によって明らかにした。セルジュ・パウシェ(フランス国立自然史博物館)は、「リニューアールしたパリのミュゼ・ド・ロムで表現された動物と植物と人間の関係」のなかで、地球の文化の多様性ではなく文化の普遍性のもとに新たな展示を試みた。彼は、自然の概念化、家畜化・栽培化、生物多様性の消失に分類することで、生き物—人関係の変遷を区分している。

本シンポジウムの目的は、歴史生態学の視点から人類と生き物とのかかわり方の現在および過去を把握することにあった。これまでアマゾン盆地などは原生的な自然環境が残存する場所のひとつとしてみられてきた。しかし、じつは日本の里山と比較できるような人為作用を受けている自然景観であった。アジアには、世界の他の地域とは異なる動物—人、植物—人関係が見いだされるために、アジア独自の研究枠組みを構築する必要がある。筆者は、今回の会合をとおして地球の生き物と人との共生のあり方を解明するためには、生き物と人の両者の諸側面の現況を把握するのみならず、歴史生態学の視点から把握する必要があることを確認した。今後も、国際発信をし続ける必要があると考えている。

【参考文献】

- 池谷和信・林良博編 2008『ヒトと動物の関係学 第4巻 野生と環境』東京：岩波書店。
- 池谷和信編 2009『地球環境史からの問い—ヒトと自然の共生とは何か』東京：岩波書店。
- 梅棹忠夫 1967『文明の生態史観』東京：中央公論社。
- 佐々木高明 1982『照葉樹林文化の道—ブータン・雲南から日本へ』東京：日本放送出版協会。

いげや かずのぶ

国立民族学博物館人類文明誌研究部教授。人類学・地理学専攻。おもな著書に『人間にとってスイカとは何か』(臨川書店 2014年)編著に『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生』(東京大学出版会 2017年)など。